



月刊

2015

6  
月号

# みんぱく

特集

# 躍動する

# 南アジア

躍動する南アジアへ 三尾裕 / 交錯する豊かな宗教伝統 三尾裕  
 ネパールの仮面作り三〇年 南真木人 / 染織文化の今 上羽陽子  
 技術から知る南アジア 上羽陽子 / ライフスタイルの変化 松尾瑞穂  
 滋味深い、ことばの寄せ鍋 吉岡乾

# インドの匂い

インターネットの過剰と思えるような普及によつて海外旅行に行かなくなった若者が増えていく、という話をよく聞く。なるほどグーグルなどを使えば朝の十五分間の散歩など世界のどこへでも瞬時のうちに行けてしまう。でもそんなので満足なのだろうか。自分の足でヨソの国の大地を踏みしめないバーチャルな風景を何万時間見ているも結局は鈍麻化した精神は何も変わらないだろう。活字でもネットのメディアでも絶対にわからないものにもその国の「匂い」がある。

「インド」でいうとどんな匂いが待っているのだろう。ぼくはたいへん安易ながら「カレー」の匂いではないか、と想像した。ところが実際は違っていた。濃厚な「甘い」匂いが待っていたのだ。あれはいろんな花がまじった芳香だろう。どちらかといえば「ねっとり」としていてその思いがけなさに頭がくらくらした。

これは最初に行ったムンバイの例だが、季節によつてもだいぶ違うだろう。しかしインドの空港はどこもカレールの匂いではなかった。インドIIカレールの匂い、という思いこみは「巴里の空の下オムレツのにおいは流れる」という石井好子さんのエッセイからのスリコミ的連想があつたのかもしれない。

## 椎名 誠

プロフィール  
1944年東京都生まれ。作家。  
流通業界誌編集長を経て、『本の雑誌』編集長。1979年より作家活動に入り、『犬の系譜』（講談社）で吉川英治文学新人賞、『アド・バード』（集英社）で日本SF大賞を受賞。著書に、「怪しい探検隊」シリーズ（角川文庫）、「赤マント」シリーズ（文藝春秋）、『丘物語』、『インドでわしも考えた』（ともに集英社文庫）をはじめ、私小説、紀行エッセイ、写真集など多数。

モンゴルは乳とバターの匂いだった。これは飛行機に乗ったときからそいつが強烈で、まだ到着する前からもうすでにモンゴルで、強引に慣らされていく。

アフリカは枯れた草と動物の糞の匂いが強烈だった。韓国はソウルなど首都ではそれほど感じないが、いきなり田舎に入っていくとやはりキムチの匂いが吹いてくる風の中に濃厚でなんじかホツとする。同じ韓国でも済州島はニンニクの匂いが強烈で、ニンニクアレルギーの人は要注意というくらいだった。

チベットは圧倒的にバター茶と香の匂いだ。中国の「同化政策」という国策でどんどん変わってきているが、巡礼が集まるバルコルなどはこの匂いが絶えたことがない。

再びインドに話を戻すが、ガートでの沐浴で有名なバラナシに行ったときは花と香と煙の匂いがそれぞれ濃厚に渦巻いていて、そこをすさまじい旋律の宗教歌が流れていきそのエキゾチズムが強烈だ。それまでの自分の気持ちをやま視している世界のものに吸収するまでずいぶん長い時間が必要だった。匂いを外して異国とかその民族について語ることはできない、といつも思っている。

## 月刊 みんぱく

6月号目次

- 1 エッセイ 千字文  
インドの匂い  
椎名 誠

### 特集 躍動する南アジア

- 2 躍動する南アジアへ  
三尾 稔
- 4 交錯する豊かな宗教伝統  
三尾 稔
- 5 ネパールの仮面作り三〇年  
南 真木人
- 6 染織文化の今  
上羽 陽子  
技術から知る南アジア  
上羽 陽子
- 8 ライフスタイルの変化——ワインとピーフ  
松尾 瑞穂
- 9 滋味深い、ことばの寄せ鍋  
吉岡 乾

- 10 集めてみました世界の〇〇

### 乗り物編

信田 敏宏

- 12 みんぱく Information

- 14 味の根っこ

### 菜食版 バインセオ

伊藤 まり子

- 16 文化遺産おもてうら

### 変化と伝承のはざままで——中国、モンの衣装

宮脇 千絵

- 18 音の居場所

### 女形ダンサーが生まれ変わるとき

福岡 まどか

- 20 人間学のキーワード

### アクターネットワーク

久保 明教

- 21 次号予告・編集後記

特集

# 躍動する南アジア

「躍動する南アジア」をテーマに、今年三月一九日にオープンした南アジア新展示。一九九六年二月の南アジア展示場新設以来、約二〇年ぶりの全面的リニューアルである。これまでの精神世界を強調した展示から、人びとの営みの多様性へと焦点を変え、目ざましい経済成長を続ける南アジアの活力に迫っている。本特集では、みんなの研究者が新展示の背景やみどころを解説する。



## 躍動する南アジアへ

すべては雑踏に集う

南アジアの街路はとりどりの色と音とにおいであふれ返っている。道行くものは、思い思いの姿をした老若男女だけではない。最先端をゆく新車、数十年もの中古車、トラック、バス、オートリキシャー（原動機つき三輪タクシー）、自転車の引くりリキシャー、家畜が引く荷車。ウシ、水牛、ヤギ、ヒツジ、ラクダ、ソウ、

三尾稔 民博 研究戦略センター

ブタ、犬や猫までありとあらゆる家畜や動物。およそ動くものはすべて街路になだれ込み、ひしめき合う。路はまた暮らしの場である。スナック売りにアクセサリー屋、おもちゃ屋……。さまざまな商売が振り売りや手押し車で練り広げられる。路上に暮らす人びともいる。そしてまた街路は神がみのおわす空間でもある。脇に神さまのポスターがはられ、祠がつくられる。街路の真ん中に堂々たる社が造られていることもある。盛大な祭礼や山車の巡行も街路が舞台となる。

雑踏はさまざまな人、モノ、価値観が多元的に交わりあひながら躍動する現在の南アジアの象徴的な空間だ。多彩な自然環境、数百年を超える言語、さまざまな宗教伝統、入り組んだカースト制度など、南アジアの目くるめく多様性は訪れた者を魅了する一方、その複雑さが発展を阻害すると見られてきた。しかし、グローバル化によって異質な人や商品や情報が激しく交じり合う状況が地球規模で進むようになると、南アジアで育まれてきた多様性を維持し続ける知恵はかえって強みとなっている。多言語能力を生かしたサービスが提供できるIT産業や、大小さまざまな規模で展開し独自のデザインや技を世界市場で売り込めるテキスタイル産業の成長はその代表例だろう。もちろん貧富の格差、社会的差別、暴力やテロの恐怖など大きな社会問題が根強く残っていることは間違いない。それでも、それをしのぐだけの希望が人びとのあいだに確かに定着してきている。

躍動感あふれる展示場

南アジアの新展示では、この活力にあふれる人びとの営みをクローズアップしている。その象徴が、雑踏をイメージし中央の空間を貫いて「動くもの」「運ばれるもの」を群がるように配置したテーマ展示である。その両サイドには、変化に富んだ自然環境のもとに展開する多彩な生業と、経済発展を受けて花ひらく都市の暮らしを展示している。雑踏の進む先には、手仕事の技の代表でもあり、南アジア発のグローバルな商品や情報発信を牽引するテキスタイルの世界が広がる。展示場の入り口、テーマ空間の背後には多様な価値観の共存の基礎となってきた宗教伝統の競合と交流をさまざまな造形を通して示している。

展示場には映像モニターはできるだけ置かずアナログな展示を心がけた。関連する映像はビデオテープでゆっくり見ただきたかったからである。展示物をじっくり見て、触って、躍動する南アジアを作り出している人びとの息吹を感じていただければ幸いである。

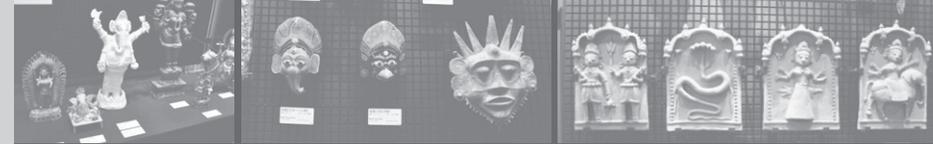


右：大都市の雑踏。インド、グジャラート州アフマダーバード  
上：ストリートのスナック売り。インド、ラージャスターン州ウダイプル  
下：路傍の社に祀られる神。インド、ラージャスターン州ウダイプル





カンチャ氏の長男ブルナ氏と家族  
ネパール、バクタプル郡ティミ



右から、ジャガンナート神、スバドラ一神、バララーム神  
インド、オディシャ州プリー  
標本番号 H0173502-H0173504



教会の土産物屋 (撮影・杉本良男)  
インド、タミルナード州ウーラーンガンニ

# 交錯する 豊かな宗教伝統

三尾 稔 みお みのる 民博 研究戦略センター

## 偉大な力を「いいとこ取り」

グローバルな人や情報の流動が急速に進むなかで、突然異なる宗教の信者が隣人として暮らしたり、それまで詳しくは知らなかった宗教の世界観や情報にメディアを通じて触れたりする状況が世界各地で当たり前のようになってきている。伝統的には宗教は一定の広さの地域の支配的な世界観を提供し、人びとの生き方の指針となるものと考えられてきた。グローバル化の進展は、こういった宗教の唯一性や絶対性を揺り動かしている。これ

は宗教の名の下での暴力や紛争が世界各地に頻りに生じている背景のひとつとなっている。

そういう目で見ると、南アジアの宗教文化は現代のグローバル化のなかでの宗教の状況をずっと以前から先取りしていたといえるだろう。南アジアでは古くからバラモン教から発展したヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教といった宗教が、民俗的な信仰や儀礼を吸収しながら、相互に競合し影響を与え合ってきた。さらにユダヤ教(紀元二世紀ごろ)、キリスト教(確実な証拠が残っている限りでも六世紀ごろ)、イスラム教、ソロアスター教(ともに八世紀ごろ)などが次々に伝わった。これらの宗教は、ときには激しく排斥し合うこともあったが、どれも圧倒的な支配勢力とはならず、競合しながら共存してこの地域に根づいていった。現代の南アジアの人びとの暮らしをみても、異なる宗教のさまざまな神や聖者をむやみに否定せず、その偉大な力を「いいとこ取り」してあやかっている。多宗教状況をたくみに生きる知恵が確かに受けつがれてきているのである。異なる宗教間の競合と共存のなかから、ヒンドゥー教とイスラム教を批判しつつ合一させたシク教のような宗教も生まれた。

## 人びとの祈りの世界

南アジア新展示の「宗教文化——伝統と多様性」のセクションでは、こういった宗教伝統の共存のすがたをさまざまな神がみの造形

# ネパールの 仮面作り三〇年

南真木人 みなぎ と 民博 研究戦略センター



故ビレンドラ国王と王妃をかたどった塩コショウ入れ  
ネパール、バクタプル郡ティミ  
標本番号H0276544、H0276545

## 仮面作りの工房を訪ねて

新しい南アジア展示場の「宗教文化」と「生態となりわい」のセクションに、極彩色の大きな仮面がある。ヒンドゥー教の神がみをあらわすこれらの仮面は、ネパールのティミという町で、ネワールの絵師カーストであるカンチャ・チトラカール氏が作ったものだ。一九八二年に藤井知昭名誉教授によって収集され、その詳細な制作工程もビデオテープの「ネパールの面作り」に収められている。かねてから映像に記録された人びとのその後を知りたいと思っていたわたしたちは、二〇一三年カンチャ氏の工房を訪ね、約三〇年のあいだに仮面作りや生活がどのように変わったのかを再び映像で撮らせてもらった。それはまた、当時撮影した映像をDVDの形でお返しする目的も併せもっていた。

残念なことに、カンチャ氏は二年前に九歳で亡くなっていた。だが、仮面作りは長男とその家族が継承し、細々と続けられていた。仮面作りの工程には大きな変化があった。一九九三年ごろから石膏の型が使われるようになり、仮面の種類と大きさに用意した雌型で、粗型が型取りされるようになっていた。今日でも手漉き紙の貼り付けと絵付けは一点ごとにおこなうが、ある程度の量産が可能になったのだ。だが皮肉なことに、そのころから土産物の多様化の影響で外国人観光客が仮面を買わなくなり、仮面作りは衰退の一途をたどってきた。



店頭に並ぶ仮面は激減した。上2013年、下1982年  
(ビデオテープ「ネパールの面作り」から。番組番号1376)  
ネパール、バクタプル郡ティミ

## 塩コショウ入れは語る

新展示では、カンチャ氏作の大きな仮面、カンチャ氏の妻の習作というイノシシの置物、長男が作ったバイラヴ神(シヴァ神の忿怒の形相)の顔付きの儀礼用濁酒入れと故ビレンドラ国王と王妃をかたどった塩コショウ入れが一堂に並び、そこには仮面の売れ行きが低調にもない、新商品を開発してきた試行錯誤の過程が読みとれる。また、彩色した仮面と神の顔を彫刻した土器作りの共通性、仮面舞踊の奉納や祭礼での飲酒に欠かせない器物を制作してきたチトラカール・カーストの儀礼的役割が見てとれる。

南アジア新展示のテーマは「躍動する南アジア」だが思えばそれをもっとも体現しているのは、小さな塩コショウ入れかもしれない。そのモデルである国王と王妃は、二〇〇一年に起きた王宮虐殺事件でこの世を去り、ネパールはその後、二四〇年続いた王制が倒れ連邦民主共和国に変わったからだ。店の片隅で埃をかぶっていた売れ残りの塩コショウ入れは、皮肉にも激動のネパールを戯画的に象徴する。カンチャ氏が作った仮面がネパールではほとんど残っていないが、これも数十年後にはみんぱくにのみ残る歴史的資料となるかもしれない。

四月・五日のネパール大地震で被災された方がたにお見舞い申し上げます。情報によると、カンチャ氏の工房とその上の住まいは倒壊をまぬがれ、ご無事のようにです。



イスラム教の聖者廟の祭礼での共同の食事。イスラム教徒だけでなく、ヒンドゥー教徒やジャイナ教徒も祭礼に集まり、聖者の力にすがり、皆が隣り合って食事をする  
インド、ラージャスターン州カパーサン



# 染織文化の今

うえぼ ようこ  
上羽 陽子 民博文化資源研究センター

南アジアの染織の魅力はなんだろうか。伝統的な染織品は現代のグローバル化とどのようにかかわっているのだろうか。多くの手仕事をみだす現場とは。

このような問いに答えるべく「手仕事を支える村」「分業で生きる町」「ファッション化する都市」「グローバル・インパクト」をキーワードにした「染織の伝統と現代」のセクションが南アジア展示場に新しく登場した。

## ファッションを消費する

特に注目すべきは、伝統的な染織品はもろること、海外のネットワークをも巻き込んだ現代ファッションをとりあげていることである。ファッションは、現在のインド大都市のショッピングモールの目玉でもあり、インドのファッションは世界的に注目されるようになってきている。それらをつけてインド各地



「ファッション化する都市」のコーナーに並ぶサリーなどの女性衣装

の染織産地では、これまでにはないような斬新なデザインによるサリーや、宮廷衣装を模したファッションナブルな衣装もつくりだされている。伝統と世界経済の接点でうみだされる染織品やファッションは、新しい「南アジア」イメージの発信・流通を媒介する重要なメディアともなっている。

## エスニック・シック

さらに近年、南アジア特有の細やかな装飾や鮮やかな色彩と、現代的なファッション感

覚が融和した「エスニック・シック」というスタイルが確立している。ローカルな人びとの衣装や染織品に想を得た商品づくりが日本や欧米のブランドで広く展開されている。このようなスタイルのワンピースやタンクトップ、靴やかばんなどもとりあげた。それらの商品づくりに影響を与えた染織品も展示しており、比較してみることができるとも本展示の特色である。

## グローバル・インパクト

このように現在のグローバル化社会に影響を与えている南アジアの染織品は、すでに一七世紀ごろからヨーロッパをはじめ世界各地

で人気を博し、相互に活発な交流がおこなわれてきた。それらをしめす極薄木綿布のモスリンや、多色染めの木版捺染布、緻密なタテヨコ縞布、カシミヤ・シヨールなども展示に組み込んだ。これらは南アジアの宮廷や貴族の庇護を受けた職人によってつくりだされたものであり、洗練された緻密で繊細な染織技術が世界にインパクトを与えてきたのだ。これらの魅力を感じとりやすいように、できるかぎり針目や布の風合いまでも感じとれるような展示配置や露出展示を心がけた。

新しくなった展示場で、伝統染織品から現代ファッションまでの今を生きる南アジア染織文化に触れていただきたい。



両面木版捺染布の製作風景  
インド、グジャラート州カッチ地方アジュラクプール



## 技術から知る南アジア

うえぼ ようこ  
上羽 陽子 民博文化資源研究センター



## 染織は難しい？

展示場に並ぶ数多くの染織品。それらのキャプションには「縞織、紋織、捺染、媒染剤など、専門用語がたびたび登場する。興味はあるが染織品のどこに注目してよいかわからない、専門用語が難しい……。そのような人びとに向けて、南アジアの特徴的な染織技術を紹介する染織技術解説パネルをあらたに設置した。

## 技術を表示すること

技術を表示するとき、つい映像や写真といったメディアに頼りがちだが、わたし自身それが最良の方法とは考えていない。どういった方法で南アジアの染織技術を解説するか。展示デザインの段階から今回パネル作成をお願いした朝岡工房と膝をつき合わせることに丸二年。技術模型と南アジア各地で収集した実物を多用する方向性が決まり、ようやく現在の姿となった。

一六枚のパネルには刺繍やアップリケの縫い工程、平織・綾織・縺子織の組織の違い、紋織や縫取織、綴織、縞織などの織技術、複雑な多色染めの工程などをとりあげた。それぞれの技術の特徴を南アジアの実物の布をもちいて説明することで、来館者の興味を増幅させるデザイン構成とした。

## 回転するパネル

染織品は表面と裏面をみることで理解をより深めることができるため、展示場の染織品にも裏面をみせる展示手法をとりいれている。技術パネルも回転式にし、両面からみることで縫い目や織り目などをじっくり観察できるようにした。

さらに、南アジアの染織技術を支えてきた木綿や羊毛、野蚕など多様な天然繊維素材や、ビーズやタカラガイ、ガラスミラーなど多種類の刺繍素材の実物も回転式アクリルケースに入れて詳細に比較できるようにした。

## つくり手に思いをめぐらせる

展示されている染織品と技術パネルとをぜひ見比べてほしい。村落の女性による刺繍技術は、限られた布や糸を最大限に工夫していること、職人による染織技術はいくつもの道具や分業によって支えられてきたことがわかるだろう。技術を知ることとはつくり手に思いをめぐらすことでもある。手仕事やものづくりはその地域の文化や社会のエッセンスが凝縮されているのだ。技術をおしえて南アジアの今を知っていただきたい。

# ライフスタイルの変化 —ワインとビール

まつお みずほ  
松尾 瑞穂 民博 先端人類科学研究部

## ワインブームの到来

かつて、インドにいる外国人にとつての困りごとは、気軽に酒を飲める手頃なレストランが少ないということだった。インドでは伝統的に飲酒は悪徳とされ、禁酒運動も盛んであったため、日常的に飲酒の習慣があるのは、外国人ともつきあいのあるエリート層か、下層の労働者階級に二極化されていた。おのずと酒も、旧宗主国である英国の影響を受けたワイスキーやラム酒か、密造酒まがいの安価で低品質な酒類が主流であった。したがって、酒を楽しみたいときは、高級ホテルのバーに行くか、



上：ワイナリーではツアーとともに試飲もできる  
下：レストランでワインを楽しむ若者たち  
ともに、インド、マハーラーシュトラ州ナシク

男たちがたむろしている街角の「リカーショップ」で立ち飲みするくらいしか、選択肢がなかったのである。特に女性が飲酒をするなどもつてのほかであるから、酒飲みの女性は肩身の狭い思いをするしかなかったようだ。

それが、近年では都市の中間層のあいだで、ビールやワインを楽しむという習慣が広まりつつある。火付け役は、生産が拡大する国産ワインである。レストランやコテージが併設されたワイナリー巡りも人気となっており、夫婦でワインを楽しむ姿も見られるようになってきた。飲酒に関しては、階層だけでなく、世代間のギャップも大きくなりつつある。

## 牛肉禁止令

ワインにはおいしい肉料理を……と思うのか、ワインブームとともに食にも変化があらわれている。インドには食に対するタブーも多く、特にヒンドゥー教徒にとつて牛は聖なる動物であるため、マクドナルドでも牛肉は使っていないというのはよく知られた話である。だが、インドではまったく牛肉を口にすることができないのか、というところはない。イスラム教徒など、ヒンドゥー教徒以外の人にとっては、牛肉を食べることはタブーではないし、ヒンドゥー教徒とは決して一緒に行けないが、ムンバイのような大都市では高級ステーキハウスも人気になっている。

ところが、最近、いくつかの州では「牛のと畜、牛肉の販売、保持、消費」を全面的に禁止し、違反者は数年におよぶ実刑にするという法律が施行された。急速に都市化、西洋化するライフスタイルに対する揺り戻しなのだろうか。そこには、牛肉を食べてきたヒンドゥー教徒以外の人びとを排除する政治的力が働いている。新しくなった南アジア展示の「都市の大衆文化」のセクションでは、葉血や共食用の大型の調理器具など、食にまつわる資料が展示されている。食が集団のまとまりを生み出すとともに、そこに入らない余所者も作り出すという、インド社会の特徴を感じていただければと思う。

## 滋味深い、ことばの寄せ鍋

よしおか のほほ  
吉岡 乾 民博 民族社会研究部

### みんなちがって、みんないい

比較的世界の隅々まで既製の生活用品やガジェットが浸透し、グローバル化が呪文のように方々から繰り返し唱えられている現代だが、その一方で、画一性の逆の方向、世界のもつ多様性を見逃してしまつては味気がない。例えば、ことば。アメリカ英語を幼少期から学ぶことで世界中とつながれる、これぞ国際化である、などと考えるのは嘆かわしい。どんな言語にも独特の味がある。かなで「みんなく」と書くことひとつを見ても、そこにはそうするだけの意味がある。

およそ六〇〇〇〜八〇〇〇の言語が今、世界各地で用いられている。そして、そのうちの約一割、六〇〇程度の言語が南アジアの地で運用されている。インドに興味のある方ならば、インドの紙幣に一七の公用語が印字されていることをご存知かもしれない。けれども、それはあくまで公用語。地元ことばの数となれば、イン

### 創発する風味

南アジアの言語の九九パーセント以上が、七つの語族(言語の血族)のいずれかに分類される。世界にはもっと複雑に多数の語族が入り交じっている地域もあるが、ヨーロッパの言語分布図

ドだけで四五〇くらいに上る。方言ではなく、言語が、である。展示場の言語分布図では、六〇〇言語すべてを載せるのは無理だったので、一六〇の言語(群)を示した。



インドの500ルピー紙幣。裏面には左下にヒンディー語で、右下に英語で、同じく左端には15の公用語で額面が書かれている。上から、アッサム語、ベンガル語、グジャラーティー語、カンナダ語、カシミール語、コーンカーニ語、マラーヤラム語、マラーティー語、ネパール語、オリヤー語、パンジャービー語、サンスクリット、タミル語、テルグ語、ウルドゥー語



南アジアの語族の分布図(筆者作成)

などと見比べてみれば、南アジアの言語の多様さが垣間見えるだろう。更に、他のいかなる言語とも血縁関係にない「系統的孤立語」も、南アジアにはふたつある。遠くヨーロッパにまで血縁をもつものもあれば、正体不明の言語もありと、何とも多彩な地域だ。

片やこのように多様なルーツをもちつつ、「南アジア言語圏」ともよばれるこの地域一帯の言語は、似た者夫婦のように、系統の壁を越えて獲得した共通特徴、南アジアらしさをもち合わせてもいる。多様性の土壌があつてこそ、らしさだ。寄せ鍋が、具材が多彩であるほど味に深みが出るように、南アジアの言語の多様さから津々と湧き出てくるその魅力は、筆舌に尽くしがたい。





**アイルランド 乳母車**  
1890年代に製作された乳母車。カゴの部分は枝編み細工で作られている。  
H124 x W68 x D99  
H0121661

**フランス 家馬車**  
かつてジプシーとよばれた放浪の民のなかには、最小限の家財道具をもって、こうした家馬車で寝起きしながら移動生活を続ける人びとがいた。  
H400  
H0003431

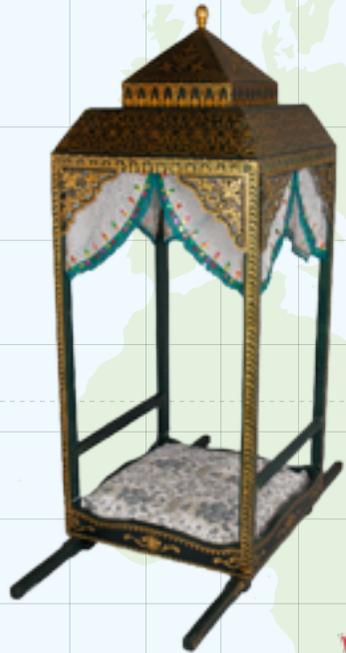


**中国 花嫁用輿**  
12世紀の南宋時代より、輿は花嫁を迎える乗り物として使用されはじめる。傘や楽隊によって先導された輿の後には、嫁入り道具を入れた箱の行列が続く。中国地域の文化展示場にて公開中。  
H229 x W150 x D157  
H0254556

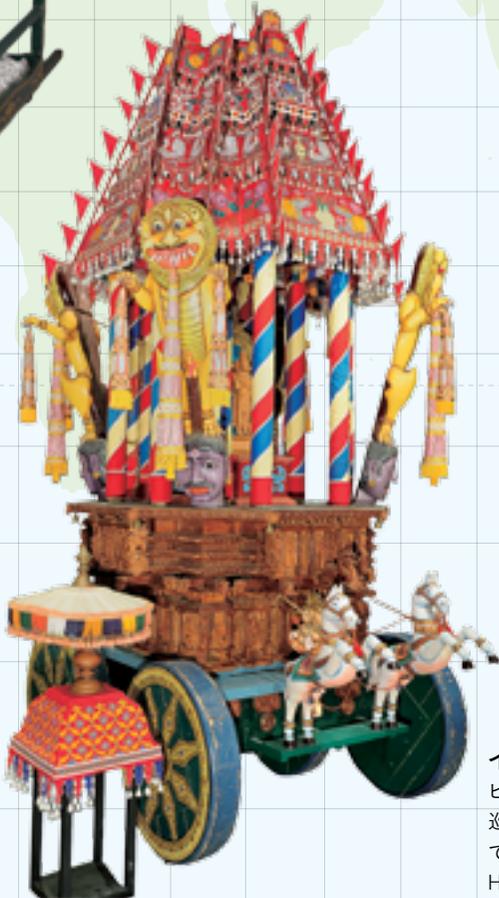


**日本(滋賀県) 曳山**  
曳山には、蒔絵(まきえ)や胴懸(どうがけ)などで装飾されたものが多い。子ども歌舞伎などの芸能の舞台となる場合もある。日本の文化展示場にて公開中。  
H600 x W200 x D500  
H0001657

**カナダ 犬ぞり**  
北極圏に暮らすイヌイットの移動手段。犬ぞりの利点は、道に迷ったときに犬たちが人家のある集落をめざす習性があることである。  
H28 x W55 x D183  
H0009849



**モロッコ 花嫁用輿**  
モロッコの都市文化では、部屋の壁や家具、衣装などに華やかな装飾をほどこす。花嫁の輿は、その代表例である。  
H195 x W74 x D150  
H0179317



**インド オート・リキシャ**  
南アジアに広くみられる簡易タクシー。リキシャの語源は日本の人力車だとされる。メーターもついているが、交渉で料金を決めることが多い。南アジア展示場にて公開中(運転席に乗車可能)。  
H168 x W130 x D257  
H0198599

**インド 山車**  
ヒンドゥー教の神の乗り物であり、動く寺院でもある。祭礼で巡行する際、山車の周囲に集まった信者たちは、祭司を介して神に供えものをささげる。南アジア展示場にて公開中。  
H730 x W275 x D360  
H0175972

**フィリピン ジープニー**  
アメリカ軍が使用していたジープを改造してつくられた小型の乗り合いバス。派手な色彩で塗装され、カーステレオを大音量で鳴り響かせながら、町を疾走する。東南アジア展示場にて公開中(後部座席に乗車可能)。  
H195 x W180 x D440  
H0202486



**信田 敏宏** 民博 文化資源研究センター

集めてみました世界の



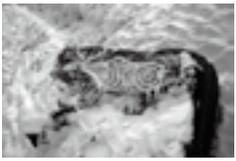
歩くこと、それは初期の人類にとって唯一の移動手段であった。しかし、その後、人類は馬や牛を飼いならして、あらたな移動手段を獲得し、さらには車輪の発明によって陸上での移動距離と移動速度を伸ばしていった。人や荷物、ときには神をも乗せて、より速く、より遠くへという人類の夢を運んできた乗り物。今回はそれぞれの文化に彩られた乗り物を紹介しよう。

※寸法の単位はセンチメートルです。

**マレーシア ベチャ**  
自転車タクシー。マレーシアではトライショーともよばれる。今日、世界遺産の町、マラッカでは観光客用に派手な装飾を施したトライショーが走っている。東南アジア展示場にて公開中。  
H128 x W138 x D218  
H0197719



企画展 「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」



雪の中から浮かび上がるヘラジカ

極東ロシアのシカチ・アリヤン村には、考古学では世界的に有名な岩面画が残されており、先住民が聖なる遺跡として守ってきました。本展では世界で初めて現在見られるすべての岩面画を拓本と写真を用いて一斉に紹介いたします。

雪の中から浮かび上がるヘラジカ

躍動する南アジア——春から秋のみんなくフォーラム2015

新しくなった展示にあわせて、南アジアの躍動感あふれる姿を、さまざまな関連イベントを通じて紹介します。

■関連イベント

◆ワークショップ

「はじめの1歩 やってみたいワークショップ」

日時 6月5日(土) 13時30分～16時30分(16時まで受付)
会場 本館エントランスホール
プログラム
①ミラー刺繍のしくみ(参加無料)
②スパンコールをつけてみよう(参加費50円)
※申込不要、対象は小学生から大人(小学3年生以下は保護者同伴のこ)、刺繍初心者向け
サポートスタッフ チーム・プラカシー(MMP)

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示を閲覧になる方は観覧料が必要です)
第445回 6月20日(土)

インド刺繍布がうみだす世界
講師 上羽陽子(本館 准教授)



サリー用布地に装飾をほどこす刺繍職人(2013年撮影)

南アジアの染織品やファッションは、現代のグローバル化にもなっており、新しい「南アジア」イメージの発信・流通を媒介する重要なメディアとなっています。インド刺繍布をうみだす風土や暮らし、担い手に焦点をあてながら私たちの身近でみることのできる「エスニック雑貨」や「民族衣装」の存在についても考えます。

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

時間 14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します!
「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
6月7日(日) 本館東南アジア横休憩所
中国チワン族の棚田観光の現状
話者 塚田誠之(本館 教授)
6月14日(日) 本館ナビひろば
次週開催!「音楽の祭日」を10倍楽しむ法
話者 出口正之(本館 教授)
6月28日(日) 本館中国展示場
伝承される伝統中国の人生儀礼
話者 韓敏(本館 教授)

音楽の祭日2015 in みんなく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなくで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんなくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。
日時 6月21日(日) 10時25分～16時35分(開場10時)
会場 特別展示館
本館エントランスホール
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日です)

公開フォーラム

「タイムマシンとしてのアステカのモニュメント——考古学的石碑の新しい解釈」
メキシコの先スペイン時代に栄えたアステカ王国の石碑についてメキシコ人歴史家フエデリコ・ナバレテ博士が講演します。
日時 6月2日(火) 15時～18時
場所 本館第6セミナー室
使用言語 スペイン語
※要事前申込、参加無料、先着20名
お問い合わせ先 鈴木紀研究室 nototo@dc.minpaku.ac.jp

公開講演会

「古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデス」
マヤとナスカを発掘調査する考古学者、環境史研究者、ラテンアメリカをフィールドとする文化人類学者が、最新の研究成果を報告します。
日時 6月6日(土) 14時～17時(開場13時30分)
会場 本館第4セミナー室
※申込不要、参加無料、先着50名
お問い合わせ先 鈴木紀研究室 nototo@dc.minpaku.ac.jp

みんなくミュージアムパートナーズ「点字体験ワークショップ」

目で読む文字から手で読む文字へ。点字で異文化コミュニケーション

●ネパール大地震の情報ポータルサイト

人間文化研究機構の現代インド地域研究国立民族学博物館拠点では、4月25日に発生したネパール大地震関連の情報を集積したポータルサイトを立ち上げました。今後さまざまな研究者の支援を得て、充実させていきます。
URL http://www.minpaku.ac.jp/nihumindas/nepal\_earthquake2015\_j.html
また、5月1日からネパール大地震災害被災地への救援金を募るため、館内に募金箱を設置しています。ご理解とご協力の程、よろしくお願いたします。
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介
■南真木人・石井溥 編著 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』 明石書店 5,200円(税抜)
■韓敏 編著 『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』 風響社 5,000円(税抜)
現代中国を作り上げている巨大な原動力、グローバル化。人々はそれを受け入れつつ、集団、地域、エスニシティ、ナショナルティ、ルーツや伝統を意識し、ローカルの現場を再構築している。
今なぜマオイストなのか、マオイストとは何者で、何をしようとしたのか、またしているのか。本書はマオイストの運動(武装闘争期)と政治(政党復帰後)を前景ないし後景に据えて、現代ネパールがかかえる諸問題に迫る。

文化コミュニケーションを体験してみませんか

日時 6月13日(土)12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

連続講座

「みんなくナレッジキャピタル——世界の「民芸」」
好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで連続講座の第2弾を開催!
時間 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1階 ナレッジキャピタル The Lab CAFE Lab.

6月3日(水)
講師 上羽陽子(本館 准教授)
インドの縫い目から——つくり手たちの知恵と工夫
6月10日(水)
講師 榎永真佐夫(本館 准教授)
ベトナム、黒タイの「竹の文化」
6月26日(金)
講師 飯田卓(本館 准教授)
手仕事のマダガスカル——アマチュア・ナチュラリストの達成

国立民族学博物館 展示ツアー
「南アジアの染織文化」
6月14日(日) 13時30分～15時
会場 本館展示場(定員30名)
案内 上羽陽子(本館 准教授)
お申込み・お問い合わせ先
一般財団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

カレシミアター「地球探究紀行」

みんなくが研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の、奥深くへ一緒にどうぞ。
時間 13時～14時30分
会場 あべのハルクス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1,000円
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
6月10日(水)
商人と布の移動からみる西アフリカ経済の変遷
講師 三島禎子(本館 准教授)
6月24日(水)
漆をつかう——漆工技術の継承
講師 日高真吾(本館 准教授)
お申込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレシミアター係
06・6633・6087

●無料観覧日のお知らせ

6月21日(日)音楽の祭日の開催日は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」
会期 6月27日(土)～8月23日(日)
休館日 毎週月曜日(ただし、月曜日が祝日の場合はその翌日)
会場 郡山市立美術館(福島県)
主催 郡山市立美術館
国立民族学博物館
千里文化財団

友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会(大阪)

時間 14時～16時
会場 本館第5セミナー室
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第443回 6月6日(土)
聖なる遺跡は物語る——アムール河の少数民族ナナイの神話をさぐる
講師 佐々木史郎(本館 教授)
●講義と併せ、企画展「岩に刻まれた古代美術」の見学会を開催します。

東京講演会

会場 モンペル渋谷店5Fサロン
定員 60名(要事前申込、先着順、会員無料・一般500円)
第112回 6月14日(日)14時～16時(講義と併せ、懇談会を開催します)
インナータライにネパール近代化の縮図をみる
——チトワン国立公園の開発を例に
講師 南真木人(本館 准教授)

標高5000メートルを超え山々に抱かれる国ネパール。一方で南部には標高1000メートル以下のタライ平原、そしてインナータライと呼ばれる盆地があります。かつてマラリアが猛威を振るったこれら低地帯では、一部の民族集団しか生活することができませんでした。しかし1951年にラオス専制政治が幕を閉じると、開発と人口移入が一挙に進み、その様相を大きく変えます。本講演会では、中央インナータライに位置するチトワン国立公園などを例に、タライ入植の歴史と自然保護区制定にもなつ住民運動を紹介し、多民族国家ネパールの近代化や現代的な課題の一端をさぐります。

体験セミナー(講義と食事・普茶料理)

第70回 6月25日(木)10時半～15時
日本の食文化——昆布に親しむ
講師 飯田卓(本館 准教授)
土居純一(「こんぶ土居」4代目)
会場 阪口楼(大阪市天王寺区)
定員40名(要事前申込、先着順)
参加費 会員9800円、(一般10800円)

# 味の根っこ



## ベトナムのお好み焼き 菜食版バインセオ

伊藤 まり子 京都外国語大学非常勤講師



バインセオは小腹がすいたときのおやつ



フランスパンと小麦粉グルテンで作る「豚の角煮」

オは、フライパン等で丸く焼いたクレープ状の生地、通常はもやしのほか豚肉とエビなどを具材として入れて蓋をして蒸した後、それを半月状に折れば完成である。これをサニーレタスなどの新鮮な生野菜で包み、ニンジンと大根のなます入りの甘酢ダレにつけて食べる。タレにはみじん切りにしたトウガラシとニンニクも入る。ウコンの粉入りの黄色みがかった生地と緑の野菜のコントラストがじつに美しい、中南部地域の伝統料理である。これが菜食となると、当然、動物性食品は一切使わずに、キノコ類や揚げ豆腐、柔らかく煮た緑豆などがおもな具材となり、その食感は動物性蛋白質の食材とさほど違いはない。

肝心なのは生地のできばえと具材の下ごしらえ  
バインセオの特徴のひとつは、米粉にウコンの粉をあわせた生地の材料をココナツミルクで溶くことにある。割ったばかりのココナツヤシ

### ベトナムで菜食

ベトナム南部地域では菜食が比較的普及している。その歴史的背景には、インドと中国双方から伝えられた仏教的慣習として広まったという説や、中国から移民してきた華人系の人びとによる宗教的慣習が徐々にベトナム人にも普及したという説等がある。現在では、喪に服すために菜食する家族がいたりすれば、旧暦の毎月一日と一五日は菜食を習慣とする若者もいる。また何かの願掛けに一定期間だけ菜食しているという中年女性もいたりする。台湾における「素食」の流行とまではいかないが、健康ブームとも重なり、ベトナムでも菜食がファッション化しつつあるのかもしれない。

大都市ホーチミンでは、「齋食」すなわち菜食を意味する「Chay」の看板を掲げたレストランや出店をいたるところで目にする。特に仏教寺院をはじめとする宗教施設周辺には多く、施設自体が菜食レストランを経営していることも珍しくはない。食事時にはいずれも大変な賑わいとなる。わたしの調査対象であるカオダイ教を信仰する人びとも菜食を重んじており、寺院内の食事はすべて菜食が提供される。

### バインセオも菜食に

調査中は寺院内で食事を摂るため、わたしも菜食になる。食の豊かなベトナムに在るのにと、不慣れに思われる方もいるかもしれない。しかしその豊富な調理法と供される料理は、わたしの



大儀礼のあとは豪華な菜食料理を皆で食す

のミルクを鍋に入れ、多少のとりみが出るまで煮立たせるとより香りが立ち、生地の風味がよくなるという。ココナツミルクに油分がたっぷり含まれていることも焼きあがった生地の食感をよくし、少しの甘味を出すうえで肝心とされる。そして菜食版では、具材選びとその下ごしらえが美味しさの重要なポイントとなる。柔らかく煮た緑豆やキノコ類を選ぶのは、肉類のようなモチモチした食感を出すため、また表面がカリカリになるまで素揚げした豆腐を入れるのは、その香ばしさが少し甘味のある生地の風味に合うからだ。

ベトナムの食文化は、歴史の変遷からインド、中国、フランスの影響を受けながら独自の深みを織りなしてきた。その大半が侵略の歴史であったことに間違いはないが、この地での菜食にも多様性をもたらし、人びとの日常生活に潤いを与えていることも、また事実なのである。



仏教寺院の前にある菜食屋さん

菜食に関する想像力をはるかに超えていて、それほど飽きることはなく、白いご飯によく合う料理ばかりだ。材料は豆腐、湯葉、大豆製プロテインなどの豆類を使った食材と小麦粉グルテン、そして野菜ばかりだが、炒め物、和え物、煮物、焼き物、蒸し物、漬物、スープ、鍋料理と調理法が豊富である。またその味付けもニュオックマム（いわゆる魚醤）ベースにはじまり、みそ風味、トマト風味、あるいはニンニクやトウガラシ風味とさまざまで、ここでも食文化の豊かさが生かされている。また、調味料も動物性原材料を使わない菜食用がもちられる。通常は小魚やエビを発酵させてつくるニュオックマムも菜食用のものは大豆製で、その風味は日本の醤油と似ている。

驚くことに、ベトナム版「お好み焼き」と称されるバインセオにも菜食版がある。バインセ

### 菜食版バインセオ (5~6人分)

〈生地〉  
米粉 260g、タピオカ粉 200g  
小麦粉 30g、ウコン粉 5g  
砂糖 5g、塩 少々  
ココナツミルク缶 400ml  
水 600ml、細ネギ

〈具材〉  
もやし 1袋、緑豆 30g  
厚揚げ 1枚 (日本の豆腐は水分が多く、柔らかいため厚揚げで代用する)、キノコ類など

〈生野菜〉  
サラダ菜、サニーレタス  
ロメインレタスなど

〈タレ〉  
人参、大根、ニンニク、トウガラシ、砂糖、酢

### 【下ごしらえ】

〈生地〉ココナツミルクを鍋に入れ、少しとろみがつくまで煮立たせる。

〈具材〉緑豆は手でつぶすことができる程度まで柔らかく煮る。厚揚げは薄切りにして、表面がカリカリになるまで素揚げする。

〈生野菜〉生野菜は水洗いして、一口大に切ったバインセオを包みやすい程度の大きさに切っておく。

〈タレ〉人参と大根は皮をむき塩もみしたのち水で塩気を洗い流して、別につくったニンニクとトウガラシ入りの甘酢ダレに浸しておく。

### 【調理】

① すべての粉類と塩、砂糖をボールに入れて、少し冷ましたココナツミルクと水を加えてよくかき混ぜたのち、小口切りにした細ねぎも加えて再び軽くかき混ぜる。

② 熱したフライパンに油をしき、キノコ類、素揚げした厚揚げを入れて少し炒める。

③ そこに生地のもとを流し入れクレープ状に焼き、その上にもやしと緑豆をのせて、蓋をして数分待つ。

④ 生地の周辺が少し焦げて全体に火が通ったらフライパンを火からおろし、半月状に折りたたむ。1枚が約1人分。

⑤ バインセオを小さく切って、準備しておいた生野菜で包み、紅白なます入りの甘酢ダレにつけて食べる。

# 変化と伝承のはざままで ——中国、モンの衣装

みやわき ちえ  
宮脇 千絵

南山大学人類学研究所研究員

中国では「非物質文化遺産」とよばれる、ユネスコ無形文化遺産。日本における自治体指定文化財と同様に、指定のレベルが上がるにつれて、知名度も上がる。しかしもともと、それらは生活の用を足すためのものだった。

## 雲南省文山州のモン衣装の現在

ミャオ族は、中国少数民族のなかでも、特にその華やかな衣装で着目される。ミャオ族のうち、雲南省文山州に居住するモンと自称する人びとの衣装は、手織りの大麻布に刺繍、藍染めやろうけつ染めをほどこし、細かいプリーツをとったスカートが特徴的で、世界各地に愛好家や蒐集家も多い。

しかしこの衣装が、一九九〇年代以降徐々に拡大していった

既製服化にともなわない、流行を生みながら大きく変化していることについて研究発表をおこなうと、しばしば「あんなに素晴らしい技術や衣装が失われていなんて」という反応にあう。大麻布は工業製の色とりどりの化繊布に、手刺繍は機械刺繍に、ろうけつ染めはそれ風のプリントに取って代わられ、ビーズやレースで過剰なほどに装飾をほどこされる。そのような衣装が現在、地元のモンに愛好されているのだ。特にこの数年、若い

女性は競ってより「新しい」「人とは異なる」デザインを求め、見た目にも従来とは異なる衣装が、モンの衣装として受け継がれている。

## 「非物質文化遺産」をめぐる動向

一方で中国では、ユネスコの無形文化遺産との関連で、各地の文学、音楽、舞踏、美術、伝統技能、民俗などを「非物質文化遺産」として登録しはじめている。二〇〇六年に第一回目の



旧正月後のモン最大の祭りには最新の流行衣装に身をつつんだ女性がたくさん。(2015年)

すすめられ、「保護」され「伝承」

されるべき「非物質文化遺産」は、増加の一途をたどっている。

二〇〇七年に、ユネスコと雲南大学の共催で文山州のモン衣装に関する国際ワークショップが開催された。そこで、モン衣装とその製作技術は、貴重で価値あるものとして保護・伝承していくべきだとの提言がされた。しかしワークショップに出席したモンの側からは、それを拒否する意見が出された。重労働である染織と、重量があり、洗濯もしにくく、「古臭い」衣装からせりか解放されたのに、なぜそれに戻らなければいけない

のか、というのである。

二〇〇〇年代半ば以降、出稼ぎや商品作物栽培によって得られる現金収入は増え、逆に教育や就業のため衣装製作にかかる時間は減少している。農村に留まる若者が減少し、技術や知識の伝承も途絶えつつある。新年に新調する衣装は、お金で買えばよいのだ。しかもそれは、素材も製法も見えた目もとても「伝統的」とはいえない、おしゃれでファッショナブルなものだ。

## 文化遺産への道

文山州には現在、四つの国家級、三一の省級の「非物質文化



文山州博物館のモン(ミャオ族)衣装の展示(2015年)

遺産」がある。服飾関連では省級として、ヤオ族藍染め製作技術、チワン族刺繍技術、ミャオ族ろうけつ染め技術、イ族服飾が登録されている。

また二〇一五年一月一日、文山州博物館が開館した。州博物館がすなわち民族博物館となっ

や生活用品が、映像やジオラマを多用しながら展示されている。入館無料ということもあって、博物館は多くの人で賑わっていた。筆者のモンの知人も、自分たちの文化が展示されていることが新鮮だったようで、スマホで撮影した写真をあれこれ見せてくれた。このように加熱する「非物質文化遺産」をめぐる動向や博物館展示を通じて、失われつつある「伝統」衣装やその技術に、モン自身が価値を見出すときがまもなく来るのではないだろうか。実際に、希少になつた大麻製のスカートは高値で販売されている。

現在、モンのあいで流行しているのは、「奇抜さ」が目をはひく素材やデザインの衣装であり、「伝承すべき」とされる「伝統」とは真逆である。文化遺産へと至る道は、このような矛盾するふたつの動きに、当事者たちがいかに折り合いをつけるのかというプロセスだといえるだろう。



染織をおこなわなくなった現在でも刺繍(クロス・ステッチ)はおこなう者が多い(2009年)



# 女形ダンサーが 生まれ変わるとき

ジョグジャカルタを拠点に活動する国民的女形ダンサー。インドネシアにおいて少数派である華人の血を引き、消えかかっていた女形の芸能を復活させた。還暦をむかえたダンサーが芸術家人生の次なるステージへと踏み出してゆく。



創作「ブドヨ・ハゴロモ」を演じるデイディ。  
2014年12月6日、ジョグジャカルタのバンサル・クパティハンにて

昨年二月、インドネシア・ジャワ島の古都ジョグジャカルタで「REBORN (再生) : International Dance Performance & Seminar」と題するイベントに参加した。これはジョグジャカルタを代表する女形ダンサーのデイディ・ニトウオ(一九五四年生まれ。以下デイディ)が自身の還暦を記念しておこなったものである。

## 女形ダンサーとして

デイディは、ジョグジャカルタを拠点として世界各地で活躍するダンサーである。福建出身の祖父をもつ彼は「プラナカン」とよばれる華人系インドネシア人であり民族的にもマイノリティであるが、それだけでなく女形専門で活躍する数少ないダンサーとしても知られている。そのライフストーリーからは、華人系としてさまざまな差別を体験し自らのアイデンティティを模索するなかで、独特な手法で多くの創作を生み出してきた芸術家としての活動軌跡を知ることができる。

ジャワ島の大衆演劇や宮廷舞踊には女形の役者、歌手、踊り手が存在していたが、

現在その伝統はすたれつつある。これらの芸能ジャンルにおいては日本の歌舞伎のように世襲制のなかで引き継がれていく伝承形態が見られない。その他にも背景にはさまざまな要因がある。女形を演じるためには、身体的素養に加えて化粧や衣装の着こなしやダンスの技量の面で高度な熟練が要求される。またジャワ島にはワリアあるいはパンチとよばれる日常的な女装者が存在する。世界最多のムスリム人口を擁するという現状もあり、国内ではこうした女装者の存在に対する批判的見解も見られる。女形は女装者と一線を画すものの、ときに同一視されることがある。そのためデイディも含め女形ダンサーは人びとが面白がって観る対象であると同時に社会的にネガティブな視線を向けられる対象でもある。デイディはこうした批判的見解の存在を意識しつつ、多くのコメディを演じて人びとの笑いをとりながら女形としての技を磨いてきた。二〇〇〇年以降、クロスジェンダーという概念を提唱しながらアジア各地の女形舞踊の伝統に基づくシリアスな作品創りにも取り組んできた。

## アジア各地の女形舞踊と創作作品の上演

今回のイベントは、アジアの各地に多様な女形の伝統が存在することを示し、自身の活動の集大成である創作作品をジョグジャカルタ王宮の王スルタンに献上し、ダンサーとしてさらに進化していくとするデイディの決意表明の機会でもあった。イベントは二

月四日夜の東ジャワ仮面舞踊と大衆演劇の公演を皮切りに始まった。翌日五日の昼間にはアジア各地の女形に関する国際セミナーがおこなわれた。五日と六日の夜には町の中心にある野外会場でダンス公演がおこなわれた。この会場は王家の所有する土地に建てられた石造りの床と柱と屋根からなる広大な空間(ブンドポ)であり、王家の結婚式をはじめ大規模な行事がおこなわれる場所でもある。五日の夜にはアジア各地のクロスジェンダー(特に女形)のダンス公演がおこなわれ、そして六日夜にはデイディが日本の能にインスピレーションを得て共同創作をおこなった作品「ブドヨ・ハゴロモ」が上演された。

## 観客と共有する時間

このイベントに対してはさまざまな評価や批評が見られたことも事実である。特に「クロス・ジェンダー」をタイトルに明記していた一部のイベントは、タイトル変更を余儀なくされ、予定していた会場が使えなくなったケースもあった。だがさまざまなクロス・



女形ダンサーによるジャワ伝統舞踊ゴレの上演。2014年12月5日、ジョグジャカルタのバンサル・クパティハンにて

ジェンダーのダンス公演は期間をとおして多くの観客を魅了した。王宮文化の中心地であるジョグジャカルタでは人びとの芸術に対する関心は高く、ダンス公演を楽しむ多くの観客の姿を目にすることができた。どの上演も休憩なしの三時間以上におよぶ長丁場であったが、ときに熱狂的雰囲気にも包まれ歓声や拍手などのレスポンスが絶えなかった夜もあれば、一方で会場を埋め尽くした観客が固唾(かたず)を飲んで見守り静かな緊張感に満ちた夜もあった。ライブのパフォーマンスは上演者と観客がその場限りの独特の空気をともに創り出すことを可能にするのだと、あらためて実感することができた。このイベントは、アジア各地の女形について多くの人がびとがその上演をともに楽しみ知ることができた機会でもあった。

アクターネットワーク論 (ANT: Actor-Network Theory)

とは一九八〇年代からブルーノ・ラトゥールやミシェル・カロ  
ンらが推進してきた学問的潮流である。ANTでは、近代社会  
にある種のダブルスタンダードに支えられた体制としてとらえ  
る。つまり、近代的な知や制度は〈人間／非人間〉、〈主体／  
客体〉、〈社会／自然〉などの対句によってあらわされるふたつ  
の領域が混ざりあったハイブリッドな存在を増殖させる一方で、  
それらの存在を捨象しふたつの領域を完全に切り離されたも  
のとすることで発展してきた。このため、近代的な学問一般に  
自然と社会の関係を一方による他方の支配という非対称的な  
図式でとらえる傾向が見られる。対してANTはふたつの領域  
が混ざりあう局面に注目し、両者を対称的に(同じ概念を用  
いて)分析する手法をとる。

分析手法の基礎となるのは、関係論的な記号理解(記号の  
意味は他の記号との関係によって決まる)をあらゆる存在に適  
用した「あるものの形態や性質は、それと他のものとの関係を  
通じて生み出される」という関係論的な存在論である。この  
原則が、人間だけでなく細菌や道具などの非人間を含むあら  
ゆる存在に適用される。これらの「アクター」が諸関係(「ネッ  
トワーク」)を生み出すと同時に各アクターの性質はネットワー  
クの働きによって規定され変化する。「アクターネットワーク」  
とは、ネットワークを作るアクターとアクターを規定するネッ  
トワークを同時に指す概念である。

もの見方が  
変わるかも？

人間学の  
キーワード

## アクターネットワーク

Actor-Network

久保明教くぼあきお 一橋大学大学院専任講師

以上のように定義されたアクターネットワークは原理的に  
不安定なものだが、アクター間の関係が安定すると一定の持続  
性をもつにいたる。あらたな存在が他のアクターへの作用を明  
確にすることで実在性を獲得していく。「試行(Trial)」、ある  
アクターを起点に種々のアクターが変化し結びつけられていく  
「翻訳(Translation)」、諸アクターが構成するネットワーク自  
体がひとつのアクターとして他のアクターと関係を結ぶように  
なり内部のアクターの働きが捨象される「ブラックボックス化  
(Black Boxing)」を通じて、ネットワークは安定化し、わた  
したちにとって自明な現実が形成される。

こうしたANTの分析手法は、事実の真偽を基礎づけるの  
ではなく、さまざまなリアリティの有り様を連続的に把握す  
るものとなっている。例えば「セロリは不味い」という命題と、  
「太陽の周りを月が回っている」という命題があるとき、一方  
は主観的な判断であり他方は客観的な事実だとするのではな  
く、むしろ、ふたつの命題を覆すためにどれだけのアクターへ  
の働きかけが必要となるかが問題にされる。前者を覆すには、  
セロリを好きになるためのさまざまな努力が必要となるが、そ  
の総体は後者を覆すために必要となる膨大なアクター(そここ  
は当然、太陽も月も含まれる)への働きかけに費やされる労  
力に比べればはるかに小さい。つまり、ある事実を事実たらし  
めている諸アクターの結びつきがいかに構築されているかとい  
う観点から、種々の事実が連続的に把握されるのである。

## 編集後記

もう四半世紀前になってしまうが、インドを何回か訪れたことがある。町中には赤紫のブーゲンビリアが咲き誇り、黄緑のオウムが飛び交っている。ホテルのロビーでは、きらびやかなサリー姿のご婦人たちが熱帯魚のように行き交う。自然の中の色も、人びとの装いも、また神様も、それまで見たことがない鮮やかさで、すべてが強烈であった。インドの太陽光を展示場で再現することはできないが、新しくなった南アジア展示場は現地の極彩色の世界にぐっと近づいて、楽しくなった。

同じころ旅したネパールが大地震に見舞われた。かつて訪れたバクタブルの寺院が崩れてピラミッドのようになってしまい、風情ある古都の町並みががれきと化した写真に驚愕。村ごと埋まってしまっていて、犠牲者の数すらまだわからない谷もあるなか、大きな余震でさらに被害が増えている。

みんぱくに拠点がある「現代インド地域研究」のホームページに、ネパール地震関連ポータルサイトが立ち上げられ、現地情報、支援活動、地震解析などのサイトリンクが集積されている（URLは本号13頁参照）。これからの復興支援の検討材料となる情報のチャンネルがよく整理されている。とりあえず、募金から始めようと思う。

(山中由里子)

●表紙：新しくなった南アジア展示「躍動する南アジア」セクションより。

## 次号の予告

特集

## 異種混濁の世界 東南アジア

## みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

## 月刊みんぱく 2015年6月号

第39巻第6号通巻第453号 2015年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子（編集長） 河合洋尚 菅瀬晶子  
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾  
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

### みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

### みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

### みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

